

平成十六年八月一日発行 第十四巻第八号 通巻第一五八号（毎月一回一日発行）  
平成三年九月十八日第三種郵便物認可

# 槐

かい

岡井省二創刊

平成16年8月号



# 真空

高橋将夫

鬼やんまの飛び込んできし鏡の間  
羅を羽織り安心してをりぬ  
夏霧に深入りしすぎたるごとし  
天蚕のつむぐ記憶の糸なりし

「俳句朝日」7月号より七句

岩清水きどあいらくの湧きにけり  
打水の打ちもらしたるところかな  
瓜番が大きな瓜に触れてをり  
晩夏光万媚の面よぎりたる  
蚊帳のなか時空にひづみありにけり  
真空のゆらぎの中の冷奴  
まどろみに金剛界の泉かな

## 槐賞受賞作品二十句

黒田咲子

床擦れのどこ一つなしほんだはら  
首くびれぬたるまひまひつぶりかな  
竹咲くや峠にきたるひだる神  
秋風来象の耳にも蓮葉にも  
口中のももいろなせる猫鮫よ  
傘立てに立てかけてある砂糖黍  
とんぼうに上からものの落ちてきて  
みたような景色のなかを菱枯るる  
星に吹く強き風あり狐畏  
湯の客も豌豆剥きに加はりぬ

旧正のみなれし天井みてねむる  
椽は幹ひきしぼりつつ大青葉  
害虫のコブノメイガに毛見の衆  
城守の秋の短さつぶやける  
綿虫と行き交ひ風邪の引きはじめ  
滴りは舌にて享けるものなりけり  
黄檗僧だるま担ぎて忌の了る  
耕人の気骨カラスの気骨かな  
濡れついでにと亀鳴いてくれにけり  
六月や黒髪ならば雨よろこぶ

# 奥の湯・一泊

大 山 里

山みみず這ひ出づ道のなつかしき  
谿水のもんどり打てる朴の花  
草の矢が飛ぶとき肩のまるくなる  
尻押しして毛虫と遊ぶペンの先  
黒百足虫ひつくり返へり生きてゐし  
菊挿すや小石の多き傾斜畑  
しやくなげの花ぴんぴんと空が張る  
花こんにやく真つ正面と言ふべかり  
青青と麦の立穂のやはらかし  
蓮浮葉汚れた犬のゐなくななり

特別作品

チヤイム鳴る植田の中の小学校  
加減よき石に亀ゐる若葉かな  
筒つぽの子が可愛がる赤蛙  
葉桜の風に飼はるる仔牛かな  
さくらんぼ山羊のまなこの藪睨み  
今年竹谿の小脇の濁り水  
ががんぼよ焼酎欲しと云うてみい  
夕河鹿狂ふ時計がときざむ  
焼酎と卯の花腐す夜の山  
雪持草終ひ湯の足止めにけり

# 槐安集

市場基巳

降り惜しむやうに降り出す穂麦雨  
日日透かす山繭の呼ぶ狐雨  
五指をすりぬけてゆく鳩弥生尽く  
河の日に焼けてぺんぺん草となる  
春もはや岸の千鳥が水を踏む

水野恒彦

金雀枝に金剛の闇ありにけり  
氷室守わけてもけふの雲迅し  
みほとけの腋にも牡丹明りかな  
正面に伐折羅の眼光白ぼたん  
佛頭のごと白牡丹黒牡丹



石脇みはる

干し網に鱒刺かかりゐたりけり  
那谷寺のうしろの山の浦島草  
杉山の入口竹の皮を脱ぐ  
桐の花蜜の匂ひのしてゐたり  
ひとしきり雨降る夜の白菖蒲

竹内悦子

プチケーキの苺はふぼる誕生日  
くすのきの花のさかりを歩きけり  
縞のシャツ着てをる大山蓮華かな  
じゃんけんの先づは石から青葉木菟  
檜扇や日本海けふおだやかに

木下野生

裏口はすぐに竹藪竹落葉  
蛇衣日当りのよきところにて  
蟻地獄雲がうごいてゐるばかり  
夏燕十字路はいま午前九時  
夏の暮木にむらさきの紐結び

中島陽華

白南風や酢甕ごろごろ日の当り  
虹立つや金毛閣より人降り来  
うそぶきや大山蓮華匂ひ出す  
つむじ風吹き抜けて行く大鮑  
木守りとならむ大山蓮華かな

延広禎一

月山や乱杭渡る夏の蝶  
流し目にまだ濡れてをる蛇の衣  
砂擦りの藤曼荼羅や籠堂  
身をよぢる磯巾着に陀羅尼の呪  
わたつみに翳せし烏頭扇かな

栗栖恵通子

白玉や仏の前の膝の皿  
月蝕の蝮袋を開けにけり  
青硯や熊野三山したたれり  
我鬼の忌の釘打つてをる四隅かな  
天地無用夏帽の飛びにけり



加藤みき

形代を納めてゐたる小さき手  
神鈴のがんらがらがら夏はじめ  
結葉をときをり通る鋭き日  
この胸のボタンとなりし鮑かな  
細り細りて金網くぐる青大将

大島翠木

なれゆえに白ぼたんまた白ぼたん  
法螺貝にぼうたん風をはやめけり  
さてもこの仏足石の青蛙  
ながむしを見て金堂に入りけり  
室生寺に秘む手鏡や傘雨の忌

雨村敏子

逃水につづく海坂真つ平ら  
臍の緒がもうとれました瓜の花  
まなざしの螢袋にありにけり  
手拍子がつづいてをるや杜若  
身拵へして卯月野に入りける



# 槐市集

久保東海司

現し世の音は聞こえず滝の前  
花蜜柑沖の潮目の定かなり  
墓藻だたみすでに水覆ふ  
でで虫に黒塀が見え三味洩るる  
つばくろの卍巴と飛びかふも

黒田咲子

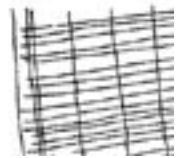
目かくしの雲が五月の祖谷山に  
神鏡の素足で詣る夕べかな  
川細る遠より螢火のふゆる  
茅花白白をんなが月に惚れたとよ  
鴨茅の青し気を抜く真昼かな

近藤きくえ

農日誌に丸印あり榛の花  
夏野菜植えし夫の背想ひぬる  
明けの鐘に思ひはめぐり暮春かな  
わが舌の麻痺せしごとく豆の飯  
胸にしむ友のやさしさ若葉雨

近藤公子

耳たぶの伸びてをるなり更衣  
薫風の宙に投げたる乳歯かな  
梅雨寒や葉研の軋む音のして  
柿若葉五十回忌を終へにけり  
郭公や手織り木綿のもんぺにて



# 槐集

## 高橋将夫選

滴りの斧入れらるる木霊かな  
枚方

中野 京子

音たてて闇を曳きくる太鼓蜘蛛  
岡崎

近藤 喜子

涼しさや比叡まぢかの石の庭  
喧噪の奥のまみどり銀沙灘

蟻螻につつまれてゆくうつつかな

五月闇面のバックをはがしをる

ぼうたんに文殊菩薩の眼かな

本多 俊子

旅発ちのあまりに早し弘法忌  
京都

近藤きくえ

炎天を来て天国と地獄絵見む

奥底の知れぬ穴なり夏落葉

水口に高野聖のゆらぐなり

梅天をのぼりし笙すゐの音すなり

泥の手を洗うてゐたり桐の花

香川 谷村 幸子

槐山房風おほらかに涼しかり  
枚方

黒田 咲子

水星を見上げてをれば蚊喰鳥

口ダンの像白雲木の花の中

一山の形をなして令法咲く

麦秋やわたつみ渡る風の色

逢ひにきて虞美人草の唇よ  
かはほりや天保山に観覧車  
大阪をとんぼがへりに花槐

蒲川公常原  
k h a o s 混沌まざと青葉の公孫樹

# 銀河往来 高橋将夫

|| 継続は力なり ||

「岡井省二のこの一句」(「槐」6月号)で秋岡朝子さんが次のように述べられている。「ふと気がつけば仲間はずり、たった一人となっていた。しかしなぜか「槐」の投句を続けている。自由自在に生きていたいからかもしれない」と。秋岡さんの所在は岡山だが、岡山に「槐」の句会はもうない。今更、去つた人達のことをとやかく言うつもりは毛頭ない。要は、一人でよく頑張つてこられたと言いたいのである。

「槐」の句会のない地で頑張っている方は他にも何人かおられる。西村純さん(東京)、久保夢女さん(竹原)、清水雨鳥さん(埼玉)加藤ひさよさん(相模原)……少し事情は異なるが、丸山分水さん(横浜)、島すが子さん、醍醐季世女さん(東京)、堀内子陽さん(大阪)達もよく頑張つておられると思う。

編集後記(6月号)で谷口佳世子さんが「自分をとりまく環境がどんな状態であれ、自分の宇宙軸をしっかり持つて静かにつくりつづけることだ。学ぶことは楽しい。」と書いている。これからの輝き続けられんことを願っている。

ところで、リーダーの選択はメンバー全体の方向を決定する。選択の結果は決してリーダー一人のものではない。秋岡さんの場合は自由に振舞えたが、大方のメンバーはその選択の結果に大なり小なり制約を受ける。選択の結果に対するメンバーへの責任の重さを改めて痛感する。

滴りの斧入れらるる木霊かな 中野 京子  
岩清水の滴る霊場。樹齢千年の大木に斧が入れられようとしている。聖域にメスが入ろうとしている。尋常でない世界がさりげなく表現されている。

炎天を来て天国と地獄絵見む 本多 俊子  
炎天に地獄絵を見るのなら普通だが、天国を見ようというから驚く。しかし、ピンチはチャンス。天国と地獄は紙一重というところか。

ロダンの像白雲木の花の中 谷村 幸子  
白い葉裏と白い花。白雲木のもとにある巨匠ロダンの像。「考える人」や「地獄の門」へと世界が広がる。

音たてて闇を曳きくる太鼓蜘蛛 近藤 喜子  
卵の袋を付けた雌蜘蛛が来る。まるで太鼓を打ちながら、闇を引きずるかのように。異界へ導かれる思いがする。

語らへばしきりに桐の落花かな 近藤きくえ  
作者はご主人をなくされたばかりで、「語らふ」のはおそろしくご主人のことばかり。桐の落花がそれをものがたつていよう。

槐山房風おほらかに涼しかり 黒田 咲子  
来阪の折、槐山房へ立ち寄ったときの挨拶句。おおらかで、涼しいひと時を過ごせてもらえてなにより。

(以下略)